

令和 2 年 9 月 8 日現在

機関番号：32205

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04483

研究課題名（和文）青年の教育社会史 栃木県南部の新制中学校や高等学校定時制課程に焦点をあてて

研究課題名（英文）Educational Social History of Adolescence focusing on the Junior High School and the Part-time course of High School in Tochigi Prefecture

研究代表者

小林 千枝子（Kobayashi, Chieko）

作新学院大学・人間文化学部・教授

研究者番号：10170333

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後も高校として残った栃木県内の全校の変遷過程を戦前から検証した。周年誌を主な史料とし、定時制課程に焦点を当てている。

その結果、定時制課程の変遷は3段階に分けられると結論づけている。第一段階は、多くの分校が開設された農業関係科を中心とする昼間定時制の全盛期である。第二段階は高度経済成長期で、教育内容の中心が農業から商工業に移り、夜間定時制が開設された時期である。第三段階では、高校進学が当たり前になった1970年代後半以降は、定時制課程がセーフティネットとなった、新しいタイプの高校になる時期である。第一段階の事例としての鹿沼農商高校を、第二段階の事例としての小山高校を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は栃木県南部を中心に、とくに高等学校定時制課程の変遷過程を通して、戦後日本の青年がどのように生きてきたかを明らかにしようとした。地域に焦点をあてることで、学校の教育内容や社会的役割、さらに、そこに身を置く生徒や教師の心性の一端をとらえることができた。また、戦後教師になった者の聞き書き調査を通して、戦後日本の学校社会の、現在とは異なる諸側面を明らかにすることもできた。

栃木県南の有名な改革者である田中正造の思想が、黒澤西蔵と留岡清男を介して、間接的ながら、戦後日本の生活教育構想の一端に影響を与えた可能性を見出すこともできた。ただし、この点はまだ可能性の段階で、今後の検討が望まれる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the transition of all schools in Tochigi Prefecture that remained as high schools after the war from the pre-war period. The focus is on the part-time course, using the anniversary magazines as the main documents.

As a result, it is concluded that the transition of the tentative course can be divided into three stages. The first stage is the heyday of the daytime part-time agricultural course, in which many branch schools were opened. The second stage is the period of rapid economic growth, when the focus of education shifted from agriculture to commerce and industry, and the evening part-time course was established. In the third stage, after the late 1970s, when it became a matter of course to go to high school, the part-time program became a safety net. It is the time to become a new type of high school. Kanuma Agricultural and Commercial High School as a first stage case and Oyama High School as a second stage case were discussed.

研究分野：日本教育史

キーワード：高等学校 定時制課程 地域教育史 新制中学校 口述 青年 社会史

1. 研究開始当初の背景

筆者は**2014**年に単著『戦後日本の地域と教育 京都府奥丹後における教育実践の社会史』（学術出版会）を刊行した。同書は京都府奥丹後（現京丹後市）を研究フィールドとした研究で、奥丹後地域の戦後の社会変動や教師たちの「地域に根ざす教育」の取り組みや教育評価研究などを、社会史の手法で明らかにした。また、高等学校定時制課程の研究も進めて来ており、戦後初期に多くの分校が設立されて、その後統廃合を繰り返してきた京都府の公立高等学校定時制課程分校や、愛知県の繊維産業との連携のもとに設置された昼間二交代定時制という独特の定時制課程についても研究を進めてきていた。これらの研究成果の一部は、橋本紀子ほか編『青年の社会的自立と教育 - 高度成長期日本における地域・学校・家族 -』（大月書店、**2011**年）に収録されている。いずれも聞き書き調査をしながら史資料を収集・分析した研究であった。昼間二交替定時制課程の分析においては、生徒会が毎年度発行していた文集を生徒たちの心性を伝える貴重な史料として分析した。

その後、研究フィールドを、筆者が居住する栃木県南地域に限定して、地域的特色も含めてより詳細にとらえ、栃木県の教育社会史を展望した。定時制課程の研究とともに、戦後初期からの中等教育の動きも把握しようと、新制中学校の研究も進めた。主な研究フィールドは、筆者自身が子ども時代と思春期時代を過ごし、かつ現在の居住地でもある栃木県小山市であった。

まず、この小山市の新制中学校や高等学校の設立過程などを調べた。戦後初期には2町8村であった現小山市に、戦後まもなく全町村に中学校が設立されたが、町村合併の過程で2校が統廃合により廃校となったことなどがわかった。この廃校となった**2**中学校の成立から廃校までの経緯を、学校沿革誌や聞き書き調査、さらには当時の新聞記事等によって明らかにした。その**2**校とは、設立後わずか**11**年で廃校になった下都賀郡生井村立生井中学校と、廃校に対して地域住民が抵抗し続けた同郡寒川村立寒川中学校である。生井中学校については、論文「新制中学校における共同体的慣行と近代的価値 栃木県下都賀郡生井村立生井中学校の成立と展開」（『作大論集』第**5**号、**2014**年）にまとめた。また、冊子『生井地区 地域教材 旧生井村に見る戦後日本のはじまり 栃木県立下都賀郡生井村立生井中学校の成立と展開』（私家版、全**18**頁）を作成して、生井地区の小学校の総合的な学習の時間で利用してもらうこともできた。寒川中学校についても「今はなき中学校の成立と展開が物語る世界」と題して、教育目標・評価学会第**26**回大会（京都教育大学にて開催）で自由研究発表として報告した。また、この**2**校の統合先となった小山市立間々田中学校に、卒業文集『ともしび』が全号保管されていることもわかった。

こうした研究の過程で、筆者は小山歴史研究会に参加するようになった。同研究会には元学校教師が多く参加しており、資料提供その他援助を受けることができた。以上の定時制課程や新制中学校の研究は、科学研究費補助にかかわる研究報告書『高等学校定時制・通信制課程の社会史研究 戦後日本の青年の生き方に関する研究』（私家版、**2016**年、**184**頁）にまとめて、勤務する作新学院大学図書館所蔵とした。

2. 研究の目的

以上の研究成果を背景として、同様の研究方法をとりながら、研究フィールドを栃木県南地域に限定して青年期教育の歴史研究を進めようとしたのが本研究である。青年期教育については、小学校卒業後、中学校、続いて高等学校へと進学して学校教育を受容し続けるエリー青年の教育と、小学校（戦時中は国民学校）卒業後、高等小学校や実業補習学校

あるいは青年学校に進む程度の学校教育しか受けずに実社会に出る大衆青年の教育との、いわゆる青年期教育の二重構造が存在していた。筆者が明らかにしたいのは、後者の大衆青年の動きである。戦後、六・三・三・四制が成立して、制度的にはこの二重構造は廃止された。とくに中学校が義務教育になったことで、校舎建築も含めて地域社会の負担は大きかったが、中学校教育が地域にもたらすものへの期待も大きかったことが、これまでの研究で確認できた。高等学校への進学率が全国平均で90%を超えるのは、高度成長が終わった1974年である。全国的に1960～70年代は義務教育終了後、進学せずに働く者や高等学校定時制課程に進学する者が少なくなかった。

大きくは、新制中学校や、定時制課程に焦点をあてた高等学校を中心とする栃木県の戦後教育史を展望して、事例研究を進めることを目的とした。その事例研究として、前記の小山市立間々田中学校に保管されている卒業文集『ともしび』は戦後間もない時期から高度成長期を経るまでの中学生の心性を把握する貴重な史料となるだろうと、これを全号借りることを考えていた。しかし、歴史に関心を持ち、筆者の研究に好意的だった同校の教頭だけでなく、校長も事務局長も異動によって変更する事態のなかで、借りること自体が困難になってきた。高等学校定時制課程については、県立及び私立の高等学校の全体像を、各学校の周年誌（『〇〇高等学校百年誌』といったようなもの）を通して把握することを目指した。また、県立小山高等学校の定時制課程が隆盛を極めた時期があったと、小山歴史研究会などでよく聞くことから、一つの事例として取り上げ、その全体像を聞き書き調査も含めて明らかにしようとした。

その一方で、前記の廃校となった新制中学校の教師だった方や、小山歴史研究会でのもと学校教師たちとの出会いから、戦後、教師になった経緯を聞く機会があり、「口述の戦後教育史」を試みようと考えた。また、本研究自体が栃木県南部に研究フィールドを限定する地域教育史であることから、栃木県のみならず、この栃木県南部固有の問題を把握することが必要になった。その固有の問題の一つが、茨城県、埼玉県、群馬県の三県と接しており、人々の生活次元では密接な交流があるということである。この三県に栃木県を含む四県に被害をもたらした足尾鉍毒事件やその被害者救済に全力を注いだ田中正造らの活動を教育の問題として取り上げることも、本研究の目的となっていた。

3. 研究の方法

筆者は一貫して聞き書き調査を重視し、その過程で史資料を収集する研究をしてきた。日常物質文化史資料に注目する社会史ないし心性史でもある。しかし、社会史の前提となる人口学的なデータの収集はできず、社会史の手法を十分にとれたとはいえない。

栃木県の教育史にかかわる文献の収集と、図書館の郷土資料コーナーで戦後間もないころの新聞の複写、各高等学校の周年誌等の必要部分の複写といった文献史料の収集は必須であった。聞き書き調査のために、関係者を筆者自身が生育過程で出会った交友関係をもとに探したり、小山歴史研究会の方々の世話になったりなどした。同研究会の方々には、資料集の上でも助けられた。

なお、栃木県の近代教育史研究として、『栃木県教育史』全5巻（国書刊行会、1981年）や『新版 栃木県教育史』上下巻（栃木県連合教育会、1990年）といった編年史的な教育史研究あるいは『栃木県中学校30年誌』（栃木県中学校長会、1977年）といった各学校の特色を列記した書物はある。しかし、それらには、各学校を青年や少年少女たち自身がどう生きたかは概して示されておらず、この種の先行研究はなきに等しい状況であった。

4. 研究成果

研究成果は大きくは三つに分けることができる。

一つは、新制高等学校について、各学校の周年誌を収集して、戦前から現代に至る変遷過程を地区ごとに、また公立ごとに、表にまとめる作業ができたことである。これは本研究の基礎作業に位置づく。これにより、未完成ながら、戦前から中等教育学校の変遷過程をとらえることができ、本研究の大きな成果となった。この表づくりを通して、定時制課程の変遷を三段階に分けることができるという結論を得た。第一段階は、分校が多く開設された農業関係の昼間定時制課程全盛期である。この段階は高等学校への進学率が高まる過程でもあり、道路や交通事情が不十分であった時点で分校が果たした役割は大きかったと推測される。第二段階は高度成長期で、教育内容の中心が農業から商業あるいは工業へと移行し、昼間定時制でなく夜間定時制が勢いを増していく時期である。第三段階は、高等学校進学が当然となった **1970** 年代後半以後の社会において、定時制課程が高等学校進学のセーフティネットになっていく時期である。

この研究を通して、各学校が発行してきている「〇〇周年記念誌」といった周年誌の史料価値が高いことを確認した。というのも、これらの多くには、生徒だった者の回想録や、生徒や教師自身が書き残したのもも収録されているからである。しかし、できることなら生徒会誌など当時の史料そのものを収集したいところである。

こうした周年誌を基礎史料として、第二段階の定時制を代表するものとして栃木県立小山高等学校定時制課程を取り上げ、かつて生徒であった筆者と同世代の女性と、定時制課程全盛期に商業の教員であった方に聞き書き調査をすることもできた。「不夜城」と言われるほどに定時制課程が勢いを増していた時期の生徒や教師たちの動向をとらえられた。定時制の生徒会誌を、一部ながら収集することもできた。第一段階を示す定時制課程として、栃木県南ではなく県央ではあるが、鹿沼農商高等学校（現在は鹿沼商工高等学校）定時制課程を取り上げた。私立中学上都賀学館の校舎を用いてはじまった上都賀農林学校を起源とする歴史ある高等学校である。大変丁寧に歴史をとらえた周年誌を参照しただけで、フィールドワークまで果たすには至らず、今後の課題となった。

こうした中等教育学校の歴史やこれまでの新制中学校の成立過程の研究を踏まえて、小山歴史研究会編集の『小山の昭和史』（私家版、**2018**年）に、現小山市域の新制中学校の変遷過程や戦前および戦時中の中等教育学校生徒たちの勤労働員の様子などを、筆者の執筆により盛り込めたのもよかった。

二つ目は、口述の戦後教育史の名のもとに教師経験者に聞き書きして、結果的に栃木県の教育史の一面をつかむ試みを始められたことである。すでに前記の廃校になった中学校の教頭を経験した方から、戦前の軍隊勤務から戦後教師になってからの様々な営みを聞くことできて、それをまとめておいた。続いて、小山歴史研究会顧問の石川学氏について同様の研究を行うことができた。その結果、文献上ではつかみがたい学校の雰囲気に加えて、戦後初期の民主主義教育の広がり方や教員組合運動の一端をとらえることもできた。

なお、前記の拙著『戦後日本の地域と教育』が、地域教育史研究の方法論上の到達点を示すとの高い評価を受けた（教育史学会編『教育史研究の最前線』六花出版、**2018**年、**90～93**頁）。その方法論とは、聞き書き調査を重ねるなかで被調査者との信頼関係を築き、その過程で貴重な史資料を入手したり話を聞いたりするというものである。筆者自身は、とくに意識せずに長年行ってきた方法であるが、自分自身のその方法を改めて考えてみよ

うと思った。そうして「聞き書きという研究方法私論」をまとめた。研究することは自分自身の来し方や生き方が問われるという結論に達した。また、教育史研究を教育学の一分野ととらえるか、あるいは歴史学の一分野ととらえるかで、分析の仕方も違ってくると考えた。筆者は前者を追究してきた。その結果、教育史研究を通して現代の教育のあり方を相対化することになると考えた。

三つめは、茨城、埼玉、群馬の3県がすぐ近くにあるという栃木県南地域の特徴にかかわって、日本における公害問題の原点とされる足尾鉍毒事件やその問題を訴え続けた衆議院議員の田中正造について、筆者なりに研究していく視点を得たことである。本研究の期間中に、地域と教育の会の全国集会が栃木県南も含む渡良瀬川流域大会として開催され、筆者は実行委員の中心となった。この研究集会で記念講演をすることになったことから、渡良瀬遊水地や足尾鉍毒事件、田中正造などについて調べた。大会開催を通してフィールドワークも行った。その結果、大変思いがけない事実に出遭った。田中正造に私淑した人に黒澤西蔵がおり、彼は正造の思想を胸に北海道の酪農開拓事業を展開し、酪農義塾を創設した。戦前の生活教育論争において、生活綴方について「教師の鑑賞に始まって感傷に終るに過ぎない」という名言を残した留岡清男が、この黒澤と接しており、留岡の生活綴方批判に黒澤を介して正造に思想が流れ込んでいる可能性が見えてきた。この事実には大変驚いたが、まだ可能性の段階であり、留岡の戦後の生活教育構想とともに考察していくことにしたい。

また、埼玉県ながら栃木県に隣接する小学校で、総合的な学習の時間を用いて、鉍毒問題ゆえにできた渡良瀬遊水地や足尾のフィールドワークを行い、6年時には田中正造研究を行っている小学校のその教育活動の実際をとらえることもできた。

最後に今後の課題を述べておきたい。

本研究は4年間で計画された。栃木県南部を研究フィールドとするとと言っても、栃木県全体の動向を把握しないわけにはいかない。高等学校の変遷過程を明らかにすることは、基礎作業として欠かせないが、それだけでかなりの時間を要した。一方で、自らの居住地である栃木県南部に目を向けることで見えてきたことがらも多く、その点では実り豊かであったし、大変多くの論考を書いてきた。しかし、テーマを定時制課程に絞ったとしても、研究は、まだ入口に差しかかった段階であると言ってよい。

今後は、大きくは次の2点が研究課題となる。

一つは、本研究に直接連なる栃木県を研究フィールドとする新制中学校や高等学校定時制に焦点をあてた青年の教育社会史研究と、それと連動させて口述の戦後教育史研究を継続することである。

もう一つは、田中正造から留岡清男への思想的流れの有無と、留岡清男の戦後の生活教育構想の特質を明らかにすることである。留岡の教育実践や教育思想について、父の留岡幸助の功績を引き継いだ北海道の家庭学校に関しては研究されている。しかし、戦前の教育科学研究会幹事長時代に痛烈な生活綴方批判をした、その留岡の生活教育構想との関連で彼の戦後の思想や実践を論じた研究は、管見の限り、目にしていない。一つ目の課題とも関連させながら、戦後の生活教育構想の一環として留岡清男にも注目していきたい。

なお、本研究の成果は、科学研究費補助にかかわる研究報告書として、小林千枝子『青年の教育社会史 栃木県南部の新制中学校や高等が呼応定時制課程に焦点をあてて』（私家版、2020年3月、全122頁）にまとめ、作新学院大学図書館に所蔵文献として保管してもらうようにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 19号
2. 論文標題 留岡清男の論考「酪聯と酪農義塾」を読む 留岡清男と田中正造の接点を探る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教科外活動と到達度評価	6. 最初と最後の頁 2-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 28号
2. 論文標題 地域と教育の「つながり」をめぐる意義と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育目標・評価学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 第84巻第2号
2. 論文標題 書評 河合務著『フランスの出産奨励運動と教育』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 100-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 329号
2. 論文標題 記念講演 地域の歴史を探ることが教育にどう作用するか 足尾鉞毒事件・谷中村廃村問題から今を考える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地域と子ども通信	6. 最初と最後の頁 4-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 第418号
2. 論文標題 研究ノート 「地域」がはらむ深みと広がり 「地域と教育の会」渡良瀬川流域集会を開催して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教科外活動と到達度評価	6. 最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 2018年2月号
2. 論文標題 シリーズ小山の歴史185 栃木農業高校の分校があった時代	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広報小山	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 第5号
2. 論文標題 道徳指導の到達度評価論的あり方	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 今日からはじめる楽しい授業づくり	6. 最初と最後の頁 52-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 第35号
2. 論文標題 書評に答えて	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本教育史研究	6. 最初と最後の頁 200-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 第17号
2. 論文標題 研究ノート/自由を貫いた教師 石川学 栃木県における口述の戦後教育史 その2	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 教科外活動と到達度評価	6. 最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 第17号
2. 論文標題 書評 竹内常一著『新・生活指導論 ケアと自治/学びと参加	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 教科外活動と到達度評価	6. 最初と最後の頁 62-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 第26号
2. 論文標題 書評 木村元著『学校の戦後史』63-66	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 教育目標・評価学会紀要	6. 最初と最後の頁 63-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 7号
2. 論文標題 教育の原点を踏まえて教育評価の特質を探る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 今日からはじめる楽しい授業づくり	6. 最初と最後の頁 66~76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 2019年11月号
2. 論文標題 見つけてしまった	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書館だより SAKUらら	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://www.sakushin-u.ac.jp/common/sysfile/topic_blocks/...	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林千枝子	4. 巻 20号
2. 論文標題 聞き書きという研究方法私論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教科外活動と教育評価	6. 最初と最後の頁 40～46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小林千枝子
2. 発表標題 課題研究2 「つながり」の歴史を踏まえて教育目標と評価の課題を探る 地域と教育の「つながり」に焦点をあてて
3. 学会等名 教育目標・評価学会第29回大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林千枝子
2. 発表標題 大学における教職課程の現状と課題
3. 学会等名 全国到達度評価研究会第35回全国集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林千枝子
2. 発表標題 地域がはらむ深みと広がり
3. 学会等名 地域と教育の会第43回全国集会福岡・行橋大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林千枝子
2. 発表標題 地域の歴史を探ることが教育にどう作用するか 足尾鉍毒事件・谷中村廃村問題から今を考える
3. 学会等名 第42回「地域と教育の会」全国大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林千枝子
2. 発表標題 <若者>から<青年>へ、そして今 現代日本の<大人になること>
3. 学会等名 第11回栃木県私学のつどい2017（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林千枝子
2. 発表標題 課題研究1 「地域」を教育目標とすることからみえてくる「つながり」の意義と課題
3. 学会等名 教育目標・評価学会第28回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林千枝子
2. 発表標題 高等学校定時制課程の教育目的論 栃木県立小山高等学校定時制課程を手がかりに
3. 学会等名 教育目標・評価学会第27回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小林千枝子
2. 発表標題 戦後日本の地域と教育 奥丹後から栃木県南部へ
3. 学会等名 日本教育史学会第605回例会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小林千枝子
2. 発表標題 高等学校定時制課程の目標論 栃木県内高等学校の変遷過程を踏まえた事例研究
3. 学会等名 教育目標・評価学会第30回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 小森谷昭平、山中正、小林千枝子、山中豊光、大輪誠、小峰新平、山中宏樹、山中和夫、湯本武、池澤延幸、落合住好、阿部一彦、山崎裕夫、大島猛、石川学、大島光雄、菅間久男、立野由美、千島玲子、武田敏子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 小山歴史研究会（私家版）	5. 総ページ数 236
3. 書名 小山の昭和史	

1. 著者名 小森谷昭平、藍田収、石川學、大島満雄、大輪誠、小林千枝子、菅間久男、山中正	4. 発行年 2018年
2. 出版社 (株)いき出版	5. 総ページ数 280
3. 書名 写真アルバム 栃木・小山・下野・下都賀の昭和	

1. 著者名 山中宏樹(小林千枝子編集)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 17
3. 書名 栃木県南教職史・生活史シリーズ2 教職者さまざま 国民学校と新制中学校の思い出	

1. 著者名 南新秀一、鉾山泰弘、吉岡真佐樹、神谷栄司、南憲治、山崎雄介、小林千枝子、佐々木英一、瀧本知加、小柳和喜雄、八木英二	4. 発行年 2018年
2. 出版社 (株)ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 274
3. 書名 現代教育の基礎理論	

1. 著者名 石川学(小林千枝子編集)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 14
3. 書名 栃木県南教職史・生活しシリーズ1 教職生活をふりかえって	

1. 著者名 小林史、小林千枝子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文芸社	5. 総ページ数 164
3. 書名 母と娘の物語 母五十歳当時の手記を娘が読み、今を語る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----